

対人関係文末言語標識の志向性について — 自然さ評定調査による中国語語気助詞の検討 —

宋歌

(東北大学大学院)

【要旨】 東アジア言語では、話し手の命題に対する態度や感情伝達の標識が文末に頻繁に使用される。中国語には対人距離調節に関わる文末詞があり、これは語気助詞と呼ばれている。本研究は対人関係を考慮したうえで、心理的距離の概念に基づく情報表現の観点に立ち、語気助詞の典型性の仮説を検証した。特に、最も代表的な語気助詞「吧 (-*ba*)」と「呢 (-*ne*)」に注目し、その典型性を確かめるための自然さ評定調査を行った。その結果、聞き手志向の文では、「呢 (-*ne*)」に比べ「吧 (-*ba*)」をつけると自然さ評定値が有意に高くなった。一方話し手志向の文では、聞き手志向とは反対に、「呢 (-*ne*)」のほうが自然さ評定値が高くなった。本論では、中国語語気助詞の「吧 (-*ba*)」と「呢 (-*ne*)」は、話者志向の違いによって典型性が変わることについて議論する*。

キーワード： 語気助詞、聞き手志向、話し手志向、典型性、中国語

1. はじめに

我々が社会的生活を送る際には、他者とのコミュニケーションが重要である。コミュニケーションの最たる例である会話においては、文の命題だけではなく、話し手が命題に対して抱く自分の気分と態度も合わせて伝達される。聞き手は、言葉を通して話し手がどのような感情を持つのかを察知できる。対面の音声言語コミュニケーション上の感情伝達では、言語標識が大きな役割を果たしている。特に東アジア言語では、話し手の命題に対する態度や感情伝達の標識が、文末(述部の右周辺部)に頻繁に使われている。

対人関係を築くためには、相手の意図や心的状況を考えなければならない。話し手は文末詞によって伝えたい情報を聞き手に共感させたり強調したりしており、これは対人関係に大きな影響を与えていると考えられる。特に、他者を近い・遠いと知覚する自己の主観的な経験状態による心理的距離は、対人関係の本質だと見なされている(Hall 1966, Beer and Keltner 2004, Bar-Anan et al. 2006, 山根 2012)。モダリティ要素としての文末詞の機能は、対人的な距離の調節にかかわるコミュニケーション機能に連結している。

* 本質問紙調査にご協力くださった方々に感謝する。

情報のなわばりへの帰属説は、神尾（1990）によって提唱された心理的距離の概念に基づく情報表現の理論の一部である。話し手または聞き手と文の表す情報との間に一次元の心理的距離が成り立つことが距離を議論する前提であり、情報の心理的距離が話し手と聞き手のそれぞれに遠か近かで文の形の適切性を説明していると考えられる。また、神尾（1990）によれば、話し手自身に何らかの深い関わりを持つ情報は、話し手にとっての<近>情報となり、聞き手との心理的距離が遠いため、話し手のなわばりに属するという。一方、聞き手に深い関わりを持つ情報は、聞き手にとっての<近>情報となり、聞き手との心理的距離が近いと、聞き手のなわばりに属するという。文末詞は、発話が話し手志向か聞き手志向かを話し手がどのようにみなすかに応じて、それぞれふさわしいものが選択される。

中国語にも語気助詞と呼ばれる文末詞が豊富に存在する。イントネーションやほかの品詞と一緒にささまざまな語気（話し手の表現意図や感情を示す語調）を表すことができるため、文末助詞とも呼ばれている（劉他 1983）。通常は文末において、話者の気分、感情、態度を反映し（Chao 1968, Li and Thompson 1981, Chu 2009）、その感情的機能は対人距離に関連づけられているという（Song 1998）。

語気助詞を通して、対人関係を考慮しながら相手との距離を調整することは、円滑なコミュニケーションのために不可欠である。さらに、語気助詞の使い方ひとつで人間関係が大きく左右されることもある。例えば「車を何台持っていますか？」と友達に聞かれたとき、答えとして「我有5台（5台だ）」と事実のみを言えば中立的な返答であるが、その文末に語気助詞「我有五台呢（5台だ-*ne*）」をつけると、意図せずとも自慢のニュアンスが生じ、相手を不愉快にさせてしまう恐れがある。このように語気助詞は話し手と聞き手の距離感をつくる要素として、対人関係表現に欠かせない要素といえる。

本研究は、「吧（-*ba*）」「呢（-*ne*）」を代表的な語気助詞と見て、相互的に比較しながらその最も基本的な意味機能を表現することを試みる。疑問文における語気助詞は、別の文型における語気助詞と異なる聞き手の意向を尋ねることになる。本研究は話し手と聞き手の共同行為に注目するため、疑問文における語気助詞については検討の対象外にする。

まずは、語気助詞「吧（-*ba*）」の用法を整理する。呂（1999: 56）、胡（1981b: 416）と賀（1992）に基づけば、「吧（-*ba*）」の基本機能を以下の3つに分類できる¹。

¹ 本稿で使用する略語を以下に示す。

1SG: 一人称 2SG: 二人称 ASP: アスペクトマーカー MP: 語気助詞 CL: 助数詞
INTR: 自動詞

(1) 「推量」

明天 下 雨 吧。

tomorrow INTR rain MP

‘It will rain tomorrow, right?’

(2) 「確認」

已经 过 了 十 点 吧。

already past ASP ten o'clock MP

‘It’s already past ten o’clock, isn’t it?’

(3) 「促し」

我 弄 好 了, 你 过 来 吧。

1SG do ASP 2SG come MP

‘I’m done so please come here.’

以上の機能は、完全に独立したものではなく、言表内容と話し手と聞き手の関係から見れば共通点がある。まず、「吧 (-ba)」を含む会話が進む前提は、聞き手側が共通の理解を持つことである (Lu 2005)。また、情報内容への接近度は、話し手より聞き手のほうが近いと指摘されている (Han 1988)。さらに、「吧 (-ba)」の使用によって、話し手が聞き手の態度を考慮できるようになると同時に、聞き手を支配するという (Lu 2005, Song 1998)。以上の先行研究における意味機能の議論をまとめると、「吧 (-ba)」は聞き手の情報のなわばりに属し、その使用によって相手との心理的距離を縮めると考えられる。それゆえ、「吧 (-ba)」をつけることによって、発話が聞き手志向であることを示すと考えられる。

一方、語気助詞「呢 (-ne)」は、(4) のように、文の情報に注意を払うように聞き手に呼びかける効果があるという (Li and Thompson 1981: 303)。

(4) (あまり他人を配慮しないような人に対して)

我 还 得 写 一 篇 论 文 呢。

I still have write one CL paper MP

‘I still have to write a paper.’

話し手と聞き手の関係から見れば、「呢 (-ne)」の使用によって、聞き手の期待と矛盾する、もしくは聞き手の予想を超えた、ある新情報を伝えることが表される (Chu 1984, 1985, 1998, He 2016)。それゆえ、「呢 (-ne)」が付される情報は話し手の管理下にあり、話し手の一方的言明だと見なされている (Wu 2009)。したがって「呢 (-ne)」は話し手情報のなわばりに属し、相手との心理的距離を遠ざける性質を持つのではないかと推

論した。それゆえ、「呢 (-*ne*)」は、発話が話し手志向であることを示すと考えられる。

以上を踏まえて本研究は、発話が聞き手志向である場合、話し手の文末に「吧 (-*ba*)」を付けると典型的な用法になり、「呢 (-*ne*)」を付けると非典型的な用法になると予測する。一方、発話が話し手志向である場合、話し手の文末に「呢 (-*ne*)」を付けると典型的な用法になり、「吧 (-*ba*)」を付けると非典型的な用法になると予測する。「吧 (-*ba*)」と「呢 (-*ne*)」の使用の典型性を検討するために、語気助詞のタイプと発話の志向性 2×2 のデザイン (表 1) に応じて用意した文例に対する自然さ評定調査を行う。

2. 方法

2.1. 参加者

中国語を母語とする話者 65 名 (うち男性 37 名) が無償で本調査に回答した。参加者の年齢は 19 から 29 歳 (平均 25.0 歳、標準偏差 2.60) であった。調査実施前に、各参加者の同意を得た。

2.2. 材料

「吧 (-*ba*)」と「呢 (-*ne*)」の使用を区別できる文脈を作るために、表 1 の通り、聞き手志向の会話の流れと話し手志向の会話の流れをそれぞれ用意した。聞き手志向の会話では、先行発話に相手が持っている何かトラブルや問題が提示され、返事発話に相手のことを考えてコメントや助言したことが提示される。話し手志向の会話では、先行発話に相手から質問されたことが提示され、返事発話に話し手自分の事情を述べたことが提示される。それぞれの会話の流れでは、先行発話に対する返事発話は同一のものにし、文末に「吧 (-*ba*)」を付けた場合と「呢 (-*ne*)」を付けた場合で比較した。聞き手志向、すなわち発話内容が聞き手の事情に関わる場合、話し手の発話の文末に「吧 (-*ba*)」を付けるのが典型的で、「呢 (-*ne*)」を付けるのが非典型的だと考えられる。話し手志向、すなわち発話内容が話し手の事情に関わる場合、話し手の発話に「呢 (-*ne*)」を付けるのが典型的で、「吧 (-*ba*)」を付けるのが非典型的だと考えられる。この想定に基づき同様の刺激を 40 セット、合計 160 会話を用意した。すべての先行発話は 8 文字で統一し、返事発話は 6 文字で統一した。

2.3. 手続き

調査参加者に返事発話の文末詞の音調を下がり調子で想像させ (疑問文として想像することを避けるため)、「吧 (-*ba*)」または「呢 (-*ne*)」の使用の自然さを 6 段階で評価してもらおう (6. 自然である / 5. やや自然である / 4. どちらかと言えば自然である / 3. どちらかと言えば不自然である / 2. やや不自然である / 1. 不自然である)。刺激会話は参加者ごとにランダム化して提示した。刺激会話の提示と調査データの取得は、オ

表 1. 刺激会話の例

発話志向性	先行発話	返事発話
聞き手志向	我 忘记 带 作业本 了。	你 回 家 去 拿 吧。 2SG go home to get MP
	1SG forget bring workbook ASP 'I forgot to bring my workbook.'	'Go home to get it.'
話し手志向	你 这次 考 得 怎么样?	你 回 家 去 拿 呢。 2SG go home to get MP
	2SG this test ASP how 'How did you do on your test?'	'Go home to get it.'
聞き手志向	我 考 了 满 分 呢。	我 考 了 满 分 吧。 1SG get ASP full marks MP
	1SG get ASP full marks MP 'I have got full marks.'	'I have got full marks.'
話し手志向	你 这次 考 得 怎么样?	我 考 了 满 分 吧。 1SG get ASP full marks MP
	2SG this test ASP how 'How did you do on your test?'	'I have got full marks.'

オンラインアンケートツールによって行った。

2.4. 分析

以上のデータについて、線形混合効果 (linear mixed effect: LME) モデリングにより解析した。語気助詞のタイプ (「吧 (-ba) / 「呢 (-ne)」、発話の志向性 (聞き手志向/話し手志向)、および両者の交互作用を固定効果として含んだ。また、各参加者、各刺激会話をランダム要因として加えた。自然さ評定値は標準化した上で分析した

データ分析には、R version 4.2.0 (R Core Team 2022) を用い、有意水準を $\alpha = 0.05$ とし、パッケージ lme4 (Bates et al. 2015)、lmerTest (Kuznetsova, Brockhoff, & Christensen, 2017) を使用した。

3. 結果

表 2 の通り、語気助詞タイプの主効果が有意であり ($\beta = -1.418, p < .001$)、「吧 (-ba)」が「呢 (-ne)」に比べて自然さが高く評定された (「吧 (-ba)」: $M = 4.06, SD = 1.92$ 、「呢 (-ne)」: $M = 3.86, SD = 1.77$)。発話志向性の主効果も有意であり ($\beta = -1.534, p < .001$)、語気助詞タイプにかかわらず、聞き手志向の発話は、話し手志向の発話より自然さが高く評定された (聞き手志向: $M = 4.17, SD = 1.86$ 、話し手志向: $M = 3.75, SD = 1.82$)。

さらに語気助詞タイプと発話の志向性との交互作用効果が認められた ($\beta = 2.611, p < .001$)。発話の志向性による語気助詞の使用の自然さ評定は、図 1 の通りである。聞

表 2. 語気助詞タイプと発話志向性の自然さ評定への影響

	β	SE	df	t	p
(切片)	-0.823	-0.042	134.3	19.78	< .001
語気助詞タイプ	-1.418	-0.019	10260	-74.53	< .001
発話志向性	-1.534	-0.038	104.1	-40.57	< .001
語気助詞タイプ×発話志向性	2.611	-0.027	10260	97.03	< .001

聞き手志向の場合、語気助詞「呢 (-ne)」の自然さ評定値 ($M=2.86, SD=1.62$) に比べ、「吧 (-ba)」の自然さ評定値 ($M=5.48, SD=0.92$) が高かった。話し手志向の場合、語気助詞「吧 (-ba)」の自然さ評定値 ($M=2.64, SD=1.58$) に比べ、「呢 (-ne)」の自然さ評定値 ($M=4.85, SD=1.30$) が高かった。

4. 考察

本研究は、心理的距離の概念に基づく情報表現の観点に立ち、自然さ評定調査により、発話の志向性に応じた中国語語気助詞「吧 (-ba)」と「呢 (-ne)」の使用の典型性の仮説を検証した。「吧 (-ba)」と「呢 (-ne)」は発話の志向性の違いによって典型性が変わることを確かめた。

まず、語気助詞タイプの主効果が有意であることは、聞き手志向か話し手志向にかかわらず、「吧 (-ba)」は「呢 (-ne)」よりも自然さが高かった。語気助詞全体の日常使用頻度からいえば、「吧 (-ba)」は「呢 (-ne)」に比べて頻出するため、今回のような自然さ評定の具体的な会話では、全体的に自然であると評価されたのかもしれない。

次に、発話の志向性の主効果が有意であることは、発話内容が聞き手志向か話し手志向かによって、使用された語気助詞に対する自然さ評定が十分な差を取ることを示している。会話における話者志向は、語気助詞の使用に重要な影響を与えられられる。特に、聞き手志向であるか話し手志向であるかを区別することが、語気助詞を適切に使用するには不可欠だと示唆されている。

さらに、語気助詞を使った文の自然さ評定値に、語気助詞タイプと発話の志向性に有意な交互作用が見られた。聞き手志向、すなわち聞き手のなわばりについて言及する発話では、返事発話の文末に「吧 (-ba)」をつけたほうが、「呢 (-ne)」をつけたのに比べて自然であると認められた。一方、話し手志向、すなわち話し手のなわばりについて言及する発話では、先行発話に対して、返事発話の文末に「呢 (-ne)」をつけたほうが、「吧 (-ba)」をつけたのに比べて自然さが高いと認められた。したがって、(1) 発話が聞き手志向である場合、「吧 (-ba)」を用いることが典型的であり、「呢 (-ne)」を用いることは非典型的である；(2) 発話が話し手志向である場合、「呢 (-ne)」を用いるこ

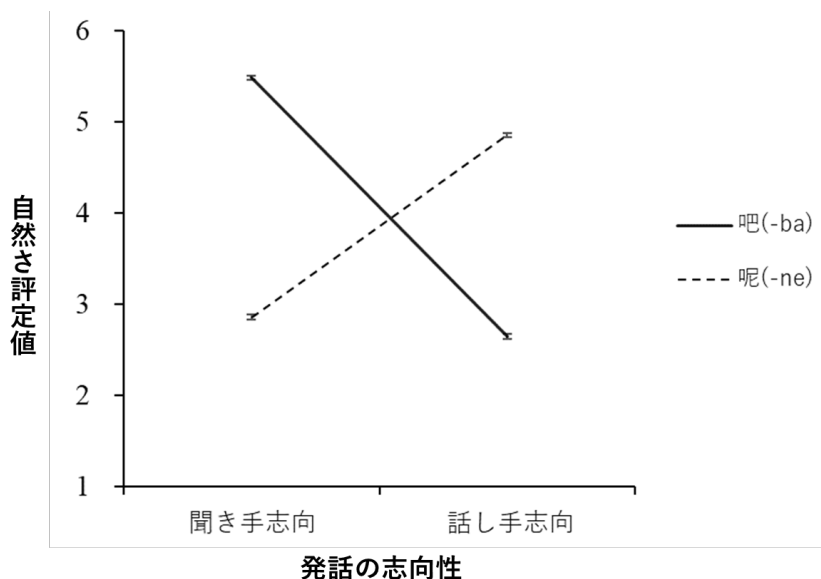


図1. 発話の志向性による語気助詞「吧 (-ba)」と「呢 (-ne)」の自然さ評価
(注：エラーバーは標準誤差)

とが典型的であり、「吧 (-ba)」を用いることは非典型的であると示唆される。

「吧 (-ba)」が聞き手志向であるということは、この語気助詞が聞き手に共通理解を要求したり (Lu 2005)、聞き手が当該情報により近い (Han 1988) という指摘と整合する。話し手は他者に向けて助言をするとき、助言の受け手である聞き手のなわ張りに入り込んで、聞き手の行動を制約すると考えられる。そのような場合には聞き手に対する侵害を軽減する機能を、聞き手志向の「吧 (-ba)」は持っているのかもしれない。

それに対して「呢 (-ne)」が自然さがより高く典型的と認められたのは、この助詞が話し手の管理下ある (Wu 2009) という指摘を裏付けている。話し手が自分自身の事情を話して自己表現する時には、聞き手のなわ張りに入らず聞き手に対する配慮の必要がないので、語気助詞を自由に選択でき、「呢 (-ne)」以外にも様々な語気助詞を使っているのかもしれない。

ただし、本研究にはいくつかの研究的限界がある。第一に、語気助詞の語用論的機能は、基本的な意味機能と具体的な文脈との相互作用から生じるものである。したがって、より多様な語用論的機能が意味機能からどう導かれるのかについては、今後の課題として更なる検討が必要である。第二に、定量調査は主観的意識を調べるものであるため、参加者が認識可能で、言語化できている概念からしか情報を集めることができないという調査面での限界がある。無意識下の感情の動きなどの脳からの反応を数値化し、調査手法では捉えきれない脳波などの神経活動反応により検証を行っていくことが求

められる。

以上のように、定量調査を用いた本研究は、話者志向の類型により中国語語気助詞の典型性が有意に違うことを明確にした。「吧 (-ba)」と「呢 (-ne)」を比べたとき、「呢 (-ne)」が触れるのは話し手の領域であるのに対し、「吧 (-ba)」が触れるのは聞き手の領域であるため、話し手から見れば、「呢 (-ne)」のほうが相対的に近接化的であり、「吧 (-ba)」は相対的に遠隔化的であると考えられる。このように、聞き手志向である発話内容に「吧 (-ba)」をつけたのが典型的で、話し手志向である発話内容に「呢 (-ne)」をつけたのが典型であることを例証した。ここに、「吧 (-ba)」と「呢 (-ne)」の対人的なモダリティ形式としての機能の相違があることが示された。

参考文献

- Bar-Anan, Yoav, Nira Liberman and Yaacov Trope (2006) The association between psychological distance and construal level: Evidence from an implicit association test. *Journal of Experimental Psychology General* 135(4): 609-622.
- Bates, Douglas, Martin Mächler, Ben Bolker and Steve Walker (2015) *Fitting Linear Mixed-Effects Models Using lme4*. *Journal of Statistical Software* 67(1): 1-48.
- Beer, Jennifer S. and Dacher Keltner (2004) What is unique about self-conscious emotions? *Psychological Inquiry* 15(2): 126-128.
- Chao, Yuen R. (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley: University of California Press.
- Chu, Chauncey C. (1984) Beef it up with *ne*. *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 19(3): 87-91.
- Chu, Chauncey C. (1985) How would you like your *ne* cooked? *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 20(3): 71-78.
- Chu, Chauncey C. (1998) *A Discourse Grammar of Mandarin Chinese*. New York and Bern: Peter Lang Publishing.
- Chu, Chauncey C. (2009) Relevance and the discourse functions of Mandarin utterance-final modality particles. *Language and Linguistics Compass* 3(1): 282-299.
- Hall, Edward T. (1966) *The Hidden Dimension*. New York: Doubleday and Company.
- Han, Yang (1988) A pragmatic study of some sentence-final and post-verbal particles in Mandarin Chinese. Doctoral dissertation, York University.
- He, Yifan (2016) The interaction between speaker-oriented adverbs and sentence final particles in Mandarin Chinese: a corpus-based approach. Doctoral dissertation, Hong Kong Polytechnic University.
- 賀陽(1992)「试论汉语书面语的语气系统」『中国人民大学学报』5: 59-66. [賀陽(1992)

- 「試論漢語書面語的語氣系統」『中国人民大学学報』5: 59-66.]
- 胡明揚 (1981b) 「北京話的語氣助詞和嘆詞 (下)」『中国語文』6: 416-423. [胡明揚 (1981b) 「北京話的語氣助詞和嘆詞 (下)」『中国語文』6: 416-423.]
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』東京：大修館書店.
- Kuznetsova, Alexandra, Per B. Brockhoff and Rune H. B. Christensen (2017) lmerTest Package: Tests in Linear Mixed Effects Models. *Journal of Statistical Software* 82(13): 1-26.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: a functional reference grammar*. Los Angeles: University of California Press.
- 劉月華・潘文娛・故鞏 (1983) 『現代中国語文法総覧』東京：くろしお出版.
- Lu, Wen Y. (2005) Sentence-final particles as attitude markers in Mandarin Chinese. Doctoral dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign.
- 呂叔湘 (1999) 『現代漢語八百詞』北京：商務印書館. [呂叔湘 (1999) 『現代漢語八百詞』北京：商務印書館.]
- Song, Mei L. W. (1998) Face Support-Chinese particles as mitigators: A study of *Ba A/Ya* and *Ne*. *Pragmatics* 8(3): 387-404.
- Wu, Guo (2009) A unified account of the discourse function of the Chinese particle “*ne*”. *Macrolinguistics* 3(3): 1-25.
- 山根一郎 (2012) 「心理的距離の動態」『人間関係学研究』11: 69-80.

**The Orientation of Interpersonal Sentence-final Linguistic Markers:
A Naturalness Rating Study of Mandarin Modal Particles**

Song, Ge

[Abstract] Sentence-final particles are frequently used to convey the speaker’s attitude or emotion toward a proposition. The sentence-final particles in Mandarin, which are called modal particles, are related to interpersonal distance regulation. This study verified the hypothesis of the typicality of Mandarin modal particles from the viewpoint of information attribution based on the concept of speaker orientation. I focused on the most representative particles “*-ba*” and “*-ne*” and conducted a naturalness rating survey to confirm their typicality. The results showed that the naturalness rating of “*-ba*” was significantly higher than “*-ne*” in the case of the hearer-oriented utterance. But in the case of the speaker-oriented utterance, the results were found to be the opposite. I argue that the typicality of the Mandarin modal particles changes depending on the speaker’s orientation of the utterance.